

On Intercultural Communication and Intracultural Reflection according to Miguel de Unamuno and Watsuji Tetsurō

MASIA CLAVEL Juan[†], KUWANO Moe[‡]

Abstract

As a reaction against the trends toward globalization during the last quarter of a century (from 1990 to 2017), the rise of the so-called populist or anti-globalist political parties and movements has provoked a lot of debate recently. Within that context, the tension between awareness of one's own cultural identity and mutual understanding of different cultures is attracting attention among researchers of the philosophy of culture. The author of this article confronted this problem while translating into Spanish the work of Watsuji Tetsuro, *Fūdo* (1935) and editing in Japanese the work of Miguel de Unamuno, *En torno al casticismo* (The essence of Spain 1895). Both Watsuji and Unamuno were aiming at a relation between cultures which integrates human universality and particular traditions, while trying to go beyond the extremes of narrow nationalism and shallow cosmopolitanism. That is what makes their insights on intercultural relations especially relevant for today's confrontation between global and local trends.

Keywords

cultural identity, inter-cultural communication, intra-cultural reflection, globalization

異文化の理解と自国の伝統への問い ～ミゲル・デ・ウナムーノと和辻哲郎の文化論をめぐって～

マシア クラヴェル ホアン[†], 桑野 萌[‡]

キーワード

国粹主義, 生粋主義, 自己同一性, グローバリゼーション, グロカリゼーション

[†] The Society of Jesus

[‡] mkuwano@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

はじめに

本論タイトルにある「異文化の理解と自国の伝統への問い」については本論文の著者、マシアが1970年代に取り組んでいた課題である。今回なぜその問題を改めて取り上げるに至ったのか、その学術背景について簡単に紹介したい⁽¹⁾。

本論文の著者、J.マシア クラヴェルは、イエズス会司祭であり、1966年に宣教師として来日した。来日後、和辻哲郎の『風土』のスペイン語訳に取り掛かる一方で、スペインの詩人であり哲学者のミゲル・デ・ウナムーノ『スペインの本質』の邦訳と編集に携わった。そして、この両者の翻訳と編集を契機に、ウナムーノと和辻の風土・文化・言語をめぐる比較思想を展開した。その中でマシアが追究したのは、真の異文化間 (*intercultural*) の対話と自己の文化内 (*intracultural*) の反省を実現することはどのようにしたら可能になるだろうかという問いであった。マシアにとって異文化間対話と自己への問い (自国、自己の文化への問い) は、一体不可分の関係にある。他者との出会いを通して異文化と対話することは、最終的には自らを振り返り、自己や自己の根差す文化を知ることにはほかならない。マシアが指摘している *intercultural* と *intracultural* の一体不可分性の問題は、現代における「グローバリゼーション」と「グローカリゼーション」を考えるための重要なカギを示唆している。今日においては世界レベルでの異文化間交流の大切さが謳われ、日本においても「グローバル化」「グローバル人材の育成」など様々な地球化を巡るスローガンがマスコミや教育界などで頻繁にきかれるようになった。その一方で、イギリスのEU離脱問題やスペインのカタルーニャ州の独立問題など、反グローバリズム的な動きが世界のあちらこちらで顕著にみられるようになった。国や文化の壁が取り払われ、諸宗教や異文化間交流の機会がますます増えているにも関わらず、異文

化と関わることに於いて得られるはずの自己同一性への気づき (自分とは何者なのかという問い) や自他の対話において相互が影響を受けあい、変革されるといった異文化間対話の本来あるべき姿が失われかけているようである。マシアがこの「グローバリゼーション」と「グローカリゼーション」の問題を研究し始めたのは半世紀前のことであった。当時、*global* や *local* などの用語は、政治・経済界ではまだあまり使われていなかった。しかし、スペインにおいても日本においても *global* と *local* の一体性をめぐって問題意識をもった文化人類学者・思想家はいた。日本においては、和辻哲郎をはじめとする近代日本の哲学者たちがその代表的な例として挙げられる。和辻哲郎の弟子である湯浅泰雄は近代日本の哲学者たちの思想について次のように分析している。日本は明治時代以降、西洋化という異質な文化の圧力のもとで近代化が一気進められた。このような背景の中で育った知識人の思想には一種の屈折した姿がみられる。この哲学者たちの「屈折した姿」が示しているのは、彼らにとって東西の思想文化の出会いとは、内と外の出会いであるよりもまず「我々自身の内なる出会い」であったことである。

湯浅が指摘した日本人における「屈折感」は現代のわれわれにとっても重要な問題である⁽²⁾。

本論においてマシアは、宗教間・異文化間の衝突、独立問題等、様々な問題が取り巻く今日において改めて前述した「グローバリゼーション」と「グローカリゼーション」の二元性克服の道を、異文化間 (*intercultural*) 対話と自己の文化内 (*intracultural*) 反省の一体不可分性をカギに再考しようと試みている。

1. 新用語の意味解説

本論に入る前に予備的な考察としてウナムーノの時代にまだ用いられていなかった次の用語

の意味を明確にしておこう。

1. 多文化的 (*multicultural*) 多様な文化が混合するときの社会のあり方を指す。
2. 超・諸文化的 (*trans-cultural*) すべての文化を超えた普遍性, 文化の壁や境界を越えた視点の置き方を指す。
3. 間・文化的 (*inter-cultural*) 異文化との対話および相互理解を指す。ウナムーノも和辻も諸文化の相互作用や相互にうける影響により相互に変革され成長し, 人類共通なものに向かって共に歩む社会のあり方を求めていた。
4. 自国の文化内の対話 (*intracultural*) 自己が育った文化, また自己が所属している文化についての自覚と批判的・創造的な対話と反省を指す。

これらの前述した最近の世界風潮の刺激を受けて, もう一度ウナムーノと和辻が提唱した異文化の理解と自己への問いを参考にして異文化の理解と自国の伝統への問いについて考察しよう。

2. 精神風土の制約の超越を求めたウナムーノと和辻

ウナムーノと和辻が共通点は, 両者とも風土を人間存在の形態として考え, 哲学的人間学の視点から精神風土の問題に迫っているところである。日本からヨーロッパへの船旅を続ける和辻はアジアのモンスーンの風土, アラビアの砂漠, それにヨーロッパの牧場という3つの風土について彼の印象を語っている。しかし『風土』の序文において和辻はあらかじめ, 同書の目指すところは単に自然環境としての風土や, 人間生活に及ぼす外的な自然環境の影響のみを取り扱おうとするのではなく, 「人間存在の構造景気としての風土をあきらかにすることである」⁽³⁾と明確に述べている。したがって「主体的な人間存在の表現としてであって, いわゆる

自然環境としてではなく」⁽⁴⁾ 風土をみるさまざまな形態を把握しようとするものであるという。

この意図を実現するにあたって, 和辻はまず日常のありふれた事実の観察から入り, そして, 厳密な哲学的思索に分け入るといった, きわめて特徴のある記述方法をとっている。和辻は風土を人間存在の様態として考えることにあると述べ, われわれの肉体の延長としてわれわれの主体性の一部を形作っている風土に目を向け, 過去全体を背負う国民全体を問題としなければならないともいう⁽⁵⁾。その国特有の風土と歴史が具体的な人間を形作るのであるから, 風土の考究にあたっては空間的・時間的構造を分離することはできないと述べている⁽⁶⁾。

和辻のもっとも強調しようとするところを要約すれば, 彼の基本的な洞察の向かうところは, 人とその風土は相即不離の関係にあるということである。彼は風土を外的な存在としてみるのではなく, 地理的, 歴史的, 文化的特性が形づくるときに相互に浸透し合い, さらに気候現象によって条件づけられていると見る。彼はしばしばこれを抽象した実体として風土性について説き, 「人間存在の構造的契機」として把握する。この「人間存在の構造的契機」という捉え方は, ウナムーノにおける人間学へのアプローチと共通した点が見いだされる。

ウナムーノは, 人が風景を見ているというよりも風景の中にいるとみる。風景の中で人間存在があらわになるというだけではなく, 人間がその独自の存在について自らに問いかけ, 自分とは何ものかという自己同一性の問題を追求するとき, いやでも風土を問題にせざるを得ないのである。それゆえウナムーノの場合には自分自身の存在そのものに対する問いと, スペインの本質的なあり方に対する問いかけが, カスティリヤ風景に対する問いかけの中に内在し, 溶け合っている。

和辻は『風土』の冒頭は一般的に人間学的な

考察を述べているが、章を追うにつれて日本の気候、歴史、文化の中で形づくられた日本人の国民性をきわめて具体的に考察している。彼は風景の中に、環境におかれている人間に対する問題というよりも、固有の風景にある固有の具体的な人間を問題としている。ここにおいて風景は、風土を意味するものとなる。

和辻のいうこの風土とは人がたとえ無意識にせよ、背負っている歴史なり、文化をもその中に内包するものである。固有の肉体の時間的空間的延長がひとつの風土であり、また歴史や文化であるという。それゆえ和辻の『風土』の中には日本とは結局何であるかという問いがみられるのである。

「私は何者」といった自己同一性への問いが片ときも脳裏をさることがなかったウナムーノはスペインの本質について問い続けた。両者の場合ともその当然の帰結として、外来のものと生粋のものとの間の緊張関係、国際主義と生粋主義とのあいだにあって微妙な揺れ動きを生む問題に直面せざるを得なくなった。

3. 国粋主義 (*cosmopolitismo*) と生粋主義 (*casticismo*) の対決

ウナムーノは、19世紀後半から20世紀の前半という時代の転換期に活躍した。激動の時代において自己を問い続けたこの哲学者は、自国への問い、および人類への問いを追求した。彼は国際主義と生粋主義の狭間で人間性の覚醒を求めた。時代が異なってはいても、ウナムーノが直面した根本的な問題の前に現代人も立たされている。1905年にウナムーノはこう書いている。「人類という世界主義的な感情と自分の生まれた小さな地方に対する愛着とが、平行して増大しつつある」⁽⁷⁾。彼は表面的な国際主義も狭い生粋主義も乗り越えようとした点で、現代に問われているグローバリゼーションの光と影に関する議論のために参考になるだろう。

ウナムーノは『生粋主義をめぐって』の中で

スペインの伝統を振り返り、当時対立していた伝統的な「生粋主義」と「近代化」の二つの動向の短所を指摘した。私はウナムーノのこの著作を和辻の『鎖国』と読み合わせたとき、スペインと日本における伝統と近代の間にある緊張について考えさせられた。

ウナムーノはスペインの黄金時代と言われている16世紀の文学と宗教的な神秘主義の伝統を広く研究し、それに基づき、1895年、当時のスペイン思想界に大きな反響を巻き起こした作品『生粋主義をめぐって』を発表した。この作品の中で彼は、イベリヤ半島の諸地方がカスティリヤを中心に統一されていく過程において、スペイン的性格がどのようにして形成されるに至ったかについて述べている。さらにスペイン思想と文学の歴史に分け入り、スペインとは何か、国の真の再起の道はどうあるべきかについて考察した。この作品の主要テーマは、「スペインの本質への問いかけ」である。

スペインの本質についてのウナムーノの考察には、時代を超えた意味をみだすことができる。例えば、諸民族の個々人が自らを掘り下げてこそ、まさに真の普遍性に向かう道が見出される、とウナムーノは主張している。真の普遍性は個々の文化の独自性を抹殺することによってではなく、むしろそれを生かすことによって得られると彼は言う。ウナムーノは、当時いわゆる「国民的再生」と呼号する人たちが口ぐせにしていた伝統の概念を再検討する必要性をみとめたが、伝統の再発見を批判的行なわなければならないとも主張した。

『生粋主義をめぐって』はスペイン人たちのうちに歴史的意識が芽生えた時期、そしてこの歴史意識の芽生えが、ついには論争の雰囲気をもしだした時点で書かれた。ウナムーノがマドリッド大学で学んでいたときには、スペインの没落と再生という問題がしきりに論議されていた。すでにそれ以前から「フランスかぶれ」に反対してきた伝統主義者たちは、今また北欧の

哲学諸派の導入に異議を唱えていた。19世紀の後半、自己認識を深めようとしていたスペインは、保守派と進歩派という両極端によって真二つに割れていたのだ。ウナムーノがスペインの歴史の中に見いだされる「内戦の種」にしきりに言及しているのも、このような背景があつてのことである。

19世紀の終わりにこうした問題をめぐって内省していたのは、ウナムーノだけではない。スペインの植民地喪失を機に、スペインの没落ならびにそこからの再生という問題を熱心に取り上げたスペイン知識人は、多くいた。一般に、「98年代の作家の多くは、いろいろな角度から、経済、政治、精神面などでの再生という角度から自国の状況を取り上げていた。

『生粋主義をめぐって』の中では、ウナムーノ自身の自伝的なものとスペインの民族的なものとが入り混じっている、この作品の中でウナムーノは、自分の民族の魂を掘り下げたことを、彼自身の問題として捉えている。これは彼にとって、きわめて切実かつ個人的な問題だった。しかしだからといって、彼は自伝的な次元のみにとどまてはいない。むしろ彼は、民族の精神と呼ぶところのものの考究に向かうために、この自伝的次元を超えようとした。そればかりでなく、自国の精神を通して普遍的なもの、永遠に人間的なものを探っていた。つまり個人の内奥に民族の魂を、そして民族の魂の根底に人間の魂を彼は見出そうとするのである。それゆえ彼は、個人主義だけでなく生粋主義をも超克し、それらを深めることによって、それらを越えるところの普遍的なもの、人間的なものに到達しようとする。しかしそれは個人もしくは祖国を否定するような道を通してではなく、それらを深めることによって求めようとしたのである。

ウナムーノは、自分の民族の精神を見つめ、その中に沈潜しようとする。庶民的な日常生活に無意識のうちに密着した民族の精神に注意を

向け、祖国の魂と本質を探る。しかも故郷バスク地方（彼の博士論文は北スペインのバスク地方の言語の起源に関するものであった）ばかりでなく、カステリヤ地方（中央スペイン）によって統一されたスペインの魂とその本質を問うのである。

ウナムーノの著作には独自の伝統の捉え方がみられる。伝統への問いかけが外国文化の侵入の問題を背景にしてなされている。当時のスペインでは、「外国文化がわれわれを侵し、生粋のものを窒息させてしまう」という声が強かった⁽⁸⁾。ヨーロッパからの侵入の流れに反対する人々は、自国のものより外国のものが読まれたり、高い評価を受けたりすることを残念に思っていた。それに対してヨーロッパ化の見方から、「生粋なことや伝統的なことを一貫して軽蔑する者たちのつぶやきが絶えることなく聞こえて」いた⁽⁹⁾。

ウナムーノはやたらに外国の文化を取り入れる態度には賛成できなかったけれども、外からの侵入にはそれなりの善い成果が伴うことも認めていた。1808年の5月2日に始まった独立戦争のことを述べて、当時のフランスからの侵入による善い実もあったことを指摘している。「侵入は痛ましいものであったが、しかし地中に種が芽生えるためには蒔くだけでは足りない。なぜならば大部分のものは腐ってしまうか、あるいは雀が啄んでしまうからである。つまり、最初に鋤の刃が大地の内部を掘り起こすことが必要なのだ。そして大抵はそのとき野生の草花はへし折られて芳香を放ちながら枯れていく」⁽¹⁰⁾。

その立場からウナムーノは二つの極端に反対していた。つまり、外国崇拜に陥っていたアナキストらにも、独裁者を求めていたナショナリスト（生粋主義者）らにも彼は反対していた。しかし、当時のスペインでは中庸の立場をとることは困難であった。皮相的な世界主義と同時

愛国心と世界に開かれた国際的な精神を求めてこう書いている。「民族というものは文明の産物であり、祖国への感情が歴史的経過の産物であること、そしてそうした祖国への感情は世界主義 (*cosmopolitanismo*) の感情とともに強化され、活気づけられるものであることはよく承知しているところである」⁽¹¹⁾。この考えはスペインと外国との関係について述べられているばかりでなく、スペイン自体の形成についても当てはまるものであり、その形成過程において中央地方 (カスティリヤ) の果たした役割について彼はこう書いている。「カスティリヤがスペインという国を形成したのは事実だが、このスペインはよりいっそうスペイン化され、その多様な内的特質の富を豊かにし、カスティリヤ的精神をより高度でより複雑な他の精神に、すなわちスペイン精神の中に吸収してきた」⁽¹²⁾。同じく、祖国の伝統と外国からの貢献を合わせて、より豊かな統一をめざしていかなければならないと言う。地方主義と世界主義とが同時に強調される場合に浅くて狭い愛国主義が乗り越えられて、まことの愛国心に至りうるであろう。ウナムーノは、カスティリヤの精神についての研究を進めるに当たってそのような意味での愛国心を目指していたのである。「われわれの文化の再生のための力を内部に求めると同時に外部にも求める必要がないかどうかを調べてみる必要がある。そして地方主義ならびに世界主義が同一の見解の二つの面であり、真の愛国心の支えであるということを、またあらゆる物体は、外からの圧力と内部の緊張との作用の上に支えられているということを示すことが必要であろう」⁽¹³⁾。

4. 歴史の流動性と「永遠の伝統」

ウナムーノの伝統をめぐる主張の一つは、現在の重大さである。永遠の伝統は彼にとって過去のことだけに還元してはいけない。現在のうちに潜んでいるものとして永遠の伝統が現

れてくる。彼は伝統について「生きたゆたかな概念」を形成しようとして、こう言っている。「ラテン語の手渡す (*tradere*) から派生した伝統 (*tradición*) という言葉は「引き渡し」 (*entrega*) に相当するもの、つまり一方から他方へと渡る (*trans*) ものである。語源の *trans* は、伝達 (*transmisión*)、移転 (*traslado*)、譲渡 (*traspaso*) などと兄弟関係にある概念である。しかしながら「渡るものは残る。なぜならば事物のひきもきらぬ流れに対して支えとなる何かがあるからである・・・諸世紀を通じて伝えられた永遠の伝統、普遍的かつ永遠の学問と芸術と伝統というものが存在する・・・過去の伝統、現在の伝統があるごとく、永遠の伝統というものがあるのである」⁽¹⁴⁾。ここでウナムーノが言っている永遠の伝統のことを彼が作った用語でいうとき「内-歴史」と呼ぶのだが、「内・歴史」 (*intrahistoria*) という考えの背景には、庶民的なものを追求してこそ普遍性に至るという彼の文化観が伺える。「歴史の波は、そのざわめきと、太陽を反射するその泡ともども、絶え間なく続く深い海、すなわち沈黙し、その最も深い底には太陽が決して届くことのない海の上を揺れ動いている。新聞は歴史を持たぬ何百万という人間たちの沈黙の生については何も語らない。彼らは一日中、そして地球上のあらゆる国々において、太陽の命じるままに起き出し、日毎の、そして永遠に続く、ひそやかで沈黙に満ちた労働を続けるために畑に向かう」⁽¹⁵⁾。この引用文に見られるように、ウナムーノはそういった「沈黙者たちの住むこの世界、この海の底、つまり歴史の下に」奥深くはいる、その中でこそ誠の伝統をさぐろうとしている。「永遠の伝統が永遠に死して死物の中に埋もれている過去にではなく、現在の中に生きているのである。永遠の伝統は現在の底部に、海の内部に求められなければならない。伝統というものは現在の底部に生きているものであり、その実体である」⁽¹⁶⁾。ウナムーノから見

れば、この真の伝統を無視するのはまさに伝統主義者の立場である。過去にこだわり過ぎる彼らは、ただ過去のむなしい影を見ているのみである。「現在の歴史は生きた歴史であり、伝統主義的発掘者たちによってないがしろされている歴史である。彼らは可能なかぎりあらゆる手段を講じて、歴史の下に生きている沈黙者たち、肉と骨を備えた人間たち、生きている人間たちのざわめきが現在の生きた歴史にまで届かないようにはかるのである」⁽¹⁷⁾。このように主張するウナムーノは批判的な目をもって自国の歴史を振り返る。そこで彼が歴史的な反省を勧める。前述した永遠の伝統は無意識のうちに庶民の生活に浸透しているがゆえに、ある国で指導的な役割を果たす者は、それを意識していなければならない。言い換えれば、彼らには特に一つの歴史的な反省が要求されている。「永遠の伝統は、あらゆる国の預言者たちが自らを光りにまで高めるために探し求めなければならないものであり、民衆をより良く導くために、民衆のうちには意識されていないものを自らのうちに意識することによって探し求めなければならないのである」⁽¹⁸⁾。このようにして、見せかけのオリジナルなもの (*original*) ではなく、まことにオリジナルすなわち根源的なもの (*originario*) が見出されるであろう。個人と同じく民族もまた、自分の欠点を美化しがちである。そこで歴史について反省して、自国の欠点を見極めた預言的な指導者が出るのが望まれる。「ヨーロッパのそれぞれの国民が誇っている国民的性格などというものは、たいていの場合彼らの欠点である。スペイン人もまたこの罪に陥っている」⁽¹⁹⁾。おのれに返り、反省し、おのが歴史の中に自分たちの痛んでいる悪の根を探ることによって、自分自身から潔められ、永遠の人類の中に沈潜する。自己の歴史的な反省を深めることによって、ある民族は自分の奥深くまで入って自己を見出す⁽²⁰⁾。ウナムーノがめざしていたこの理想に反して多くの場合に見ら

れるのは、歴史についての偏った見方である。「容赦のない反省であるべき自己の歴史の考察は、残念なことに弁解の根拠として利用される。われわれの最大の恥が栄光と呼ばれているような歴史書を読むのは旨が痛むことである。そうした作品においては、われわれの過去の罪過が自慢の種になっている。……歴史は自己反省の表明ではないかぎり、それはわれわれを古き民族から脱却させるためには何の役にも立たぬであろうし、われわれにとって救いもないであろう」⁽²¹⁾。そのためにウナムーノは歴史の研究を勧めているし、彼自身もまた、スペインの歴史についてその本質を追究する反省を行っている。「個人であれ、民族であれ、おのれを知るためには、何らかの方法で自己の歴史を研究しなければならない」⁽²²⁾。

「歴史についての無私的な認識は民族に勇気と自己認識を与え、自分の生を妨げている分解作用のがらくたを取り除くことを可能にしてくれる」⁽²³⁾。

自国の精神を探求していたウナムーノは決して当時のいろいろな国語学者や民俗学者のもとに見られたナショナリズムの態度を取ろうとはしなかった。むしろこう強調している。「われわれは内からではなく、外から自身を見出さなければならない」⁽²⁴⁾。「外部からの刺激によってわれわれの意識の内部に眠っていたものがめざめる。自分の殻の中に閉じこもるものは自己を知ることもないし、自己を所有することもない」⁽²⁵⁾。

このように外国に自己を開くと同時に、自国の伝統を深めることを勧めるウナムーノは、より根源的な意味での伝統、すなわち普遍的な人間性に根をおろす伝統を求めている。このような外部からの影響は自己を深める努力が伴うならば、より普遍的なものをわれわれに見出させる。

「生まれた土地に対する愛は世界という人間

の故郷への愛の成長と釣り合うときにのみ、実り多く健全である。・・・それら二つの愛から真の祖国愛が生まれるのである。・・・人々や民族は、互いに救済しあうのである」⁽²⁶⁾。

この意味でそれぞれの文化は自分の古典についての理解を深めると同時に、他国の古典からの影響を受け入れれば、互いに真の人間性を見出す為に役立つであろう。ウナムーノがセルバンテスを高く評価しているのはそのためでもある。セルバンテスは「純粋なスペイン人であるがゆえかえってそのスペイン主義を脱却するに至った」⁽²⁷⁾。だからドン・キホーテにおいてわれわれが見出すのは、ただ単なるスペインの伝統だけではなくて、永遠のそれなのである。それは言い換えれば普遍的な人間性だと言えよう。

「永遠の伝統は人間そのものの存在の底部である。人間こそわれわれがわれわれ自身の魂の中に探し求めなければならないものである。真に独創的なものは根源的なもの、われわれの中にある人間性なのだ」⁽²⁸⁾。

要するに、ウナムーノ自身「われわれはヨーロッパ化されなければならない」⁽²⁹⁾と主張すると同時に、「民族の中に身を浸さなければならない」⁽³⁰⁾と言う。それは『生粋主義をめぐって』の結論のところで繰り返されている。「スペインを築き上げるために自身をヨーロッパ化し、みずからを民族の中に浸すことによるのみ始めて可能である」と主張している」⁽³¹⁾。

むすび：自己と他者の統合をめざして

以上、ウナムーノと和辻の共通の関心だった風土と歴史の超越及び普遍的で人類共通なものを志す思考を参考にして考えてきた。両者の基本的な主張は、異質な文化との接触の際、自己の同一性が問われ、人間存在の風土的・歴史的

な規定とその超越の可能性について考えさせられるということである。そこで自己と他者の統合を目指巢という理想の実現は現代においてもわれわれが直面している問題であり、冒頭から強調したように、*global*なものとは*local*なものを調和させることは現代の緊急課題でもある。

そういった自己と他者の統合の目標が達せられるように、二つの対話の過程をたどる必要がある。一つは違う文化同志の対話(*inter-cultural dialogue*)であり、今一つは、自己の文化内の対話(*intra-cultural dialogue*)である。ウナムーノが好んでつかった球体のイメージで表せば、前者は球体の表面で行われる違う者の出会いによる異文化の相互理解と相互変革である。後者は、球体のどの一点からでも垂直線で球体の中心まで没入したうえで、その中から球体の他の表面の点に浮かび上がることだと言えよう。前者は直接の出会いによる異文化の理解と相互変革であって、後者は間接的に自己への没入によって生の深みの次元において他者に会うことなのである。

二人の人間や二つの文化の間の対話や出会いが起こるときには、それは二つの容器の中身の一方を単に他方に移すということではない。真の対話や真の出会いの場合には、両者の変革が行われると同時に新しいものが生み出されるのである。しかしそのためには、様々な条件がある。異文化の理解のための対話の道を歩んでいくに当たってつぎのような種々の契機を指摘できよう。

- 1) 接点を見出す契機。接点をみいださなければ何も始まらない。いくら自分と違う相手ではあっても、どこかで相通ずるところがあることを期待しながら、双方がそれを探してみる必要がある。しかし、互いの共通点しか強調しなければ話が通じたように思えても、相互影響と自己変革までいかないであろう。
- 2) 違いを認め合いながら対決することを恐れ

ない契機。違うところをぶつけ合うことばかりになれば、喧嘩に終わってしまうことにもなりかねないが、健全な対決もありうる。つまり、違うところを認め合うことによって両者とも相手から学ぶことができるようになる。そこからはじめて、両者の自己変革と新しい創造が可能となる。

- 3) 過去を振り返る自己反省の契機。対話や出会いはゼロから始まる訳ではない。対話する両者とも、それなりの過去を背負っている。環境、成育、歩んできた道などによって、私たちは皆制約されている。中立な視点に立とうとしてもなかなか出来るものではないが、自分が立っている立場について意識的に反省すれば、それが自分の立場の制約を乗り越えるためになろう。相手も同じく自分の立場の限界を認めれば、両者とも自分の過去の束縛から解放され始める。このことは個人についてだけでなく、国についても言える。どの国でも過去を振り返って、その教訓から学ぶと同時に過去の後遺症から解放される必要がある。
- 4) 橋渡しを造ったうえでの創造の契機。前述した諸契機を踏まえた上で、橋渡しをすることが可能になり始める。対話者の双方の地平が融合するのである。そしてまた新しい創造が可能となり、対話者が対話する以前には持ち合わせていなかった何ものかが、その対話で生み出される。
- 5) 生の深みに接する契機。前述した諸契機は次のようにまとめられる。すなわち、1は個と個の間の共通性、2は個と個の相違性、3は個の時空的制約の自覚、4は個と個の地平融合と言えよう。これらの契機を辿って出会いを深めることを妨げるのは各人の自己閉鎖への傾きである。したがって個から出ることが必要であろう。

しかし個から出るということは個を否定することではない。むしろ個を拡大すると同時に、個に徹して普遍に至るということである。それは時空的な制約、および文化と時代の違いを超えたかたちで生の深みの次元に身を置いて、初めて発見されるものではなからうか。

- 6) 真の普遍性。このように異文化へと自己を開くと同時に、自己の伝統を深めることを勧めるウナムーノはより根源的な意味での伝統、すなわち普遍的な人間性に根をおろす伝統を求めていた。「わが国の言語の絶滅ならびにバーバリズムの侵入についての嘆きの声があがっている。……われわれはバーバリズムという言葉を開くやいなや、それをバルバロ(蛮族)という言葉が持つ通常いきわたった意味に結びつけてしまう。つまり、われわれはしらず知らず無意識のうちに、バーバリズムの中には野蛮さの幾分かがあり、それらの侵入はわが国の言語を野蛮化すると考えてしまうのである。しかしその際われわれは次のことを忘れている。……すなわち野蛮人たちの侵入は衰退し漏水した帝国の下に窒息していたヨーロッパ文化の再生の始まりであったということである。……生まれた土地に対する愛は世界という人間の故郷への愛の成長と釣り合うときにのみ、実り多く健全である。……それら二つの愛から真の祖国愛が生まれるのである。……人々や民族は、互いに救済しあうのである」。

この意味でそれぞれの文化は自分の古典についての理解を深めると同時に、他国の古典からの影響を受け入れれば、互いに真の人間性を見出す為に役立つであろう。ウナムーノや和辻の表現をつかって言えば、真の普遍性を目指す前述した異文化の理解と自己理解の次のキーワードでまとめることができよ。すなわち、

「自覚」, 「脱却」, 「再発見」, 「没入」である。この4つの視点で本小論をむすぶことにしよう。
自覚：風土の超越のための第一の条件は、われわれが以下に風土によって地理的、歴史的に規定されているかを自覚することである。「風土の自覚を歴史的に実現することによってのみ、人間は風土の上に出ることができる」⁽³²⁾。ウナムーノは、スペイン民族の歴史を考察するにあたっての「容赦のない良心の究明」を薦める。自己を批判的に究明するきっかけとなるのは異なった文化との接触である。

脱却：ウナムーノは自国の弱点を意識して、脱却の必要性を説いた。「われわれ自身は自分自身から脱皮し、一人ひとりが肉体を脱ぎ捨て、ちっぽけな祖国から人間性へと見を閉じるのである」⁽³³⁾。と言った「ヨーロッパのそれぞれの国民が誇っている国民的性格などというのは、たいいていの場合彼らの欠点である。スペイン人もまたこの罪に陥っている」⁽³⁴⁾。「古い民族からの脱皮」も勧めている⁽³⁵⁾。

再発見：和辻は、「限定を自覚することによってその限定を超えたからといって、風土の特性が消失するわけではない。否、むしろそれによ

って一層よくその特性が生かされてくるのである」⁽³⁶⁾と言う。ウナムーノは「ある民族に新しい思想を与えたと思うとき、たとえその民族がそれを受け入れているとしても、それはその民族が気付かずにもっていたもので、われわれはただそれを彼らの思想の確信から意識の表面に引き出したにすぎない」と言う。これは狭い自己中心的な自己肯定ではなく、厳しい自己否定の契機を経過したうえでの自己肯定であり、脱却をふまえたうえでの自己の再発見である。
没入：ウナムーノの言葉：「個別的なものに入り込めば入るほど、一般的なものを再発見するものであり、民族の独自の精神に深く入れれば入るほど、ますます普遍的なものを見出すのである」。「普遍的なものに至る道は抽象よりも没入である。個人的な区別や国民的な区別を殺して、類似するような共通なところだけを浮き彫りにすれば、たぶん普遍的な何かが出てくるかもしれないが、そういった普遍性は冷たい感じを与え、色の貧弱なものになりかねないし、あまりにも単純化された哲学であると言えよう。むしろ個人的な区別や民族的な特色を生かすことこそ、普遍的なものへ導く」⁽³⁷⁾。

注

- (1) 本論文は、J.マシアの長年にわたる研究をまとめたものである。なお、「序論」と編集は桑野が担当した。
- (2) 湯浅泰雄『近代日本の哲学と実存思想』p.5-7。
- (3) 和辻哲郎『風土』岩波書店、昭和二年三月版、p.1（スペイン語第二版、ホアン・マシア訳、Salamanca: Ed. Sigueme, 2006）。
- (4) 前掲書、p.1。
- (5) 前掲書、p.15-23。
- (6) 前掲書、p.43、p.146-147。
- (7) 「スペイン的愛国心の現在の危機」ウナムーノ著作集 1、法政大学出版(1972)p.290。
- (8) 前掲書、p.8。
- (9) 前掲書、p.8。
- (10) 前掲書、p.10。
- (11) 前掲書、p.36。
- (12) 前掲書、p.39。
- (13) 前掲書、p.40。
- (14) 前掲書、p.21-23。
- (15) 前掲書、p.23。
- (16) 前掲書、p.23。
- (17) 前掲書、p.26-29。
- (18) 前掲書、p.25。

- (19) 前掲書, p.26。
- (20) 前掲書, p.32。
- (21) 前掲書, p.32。
- (22) 前掲書, p.34。
- (23) 前掲書, p.36。
- (24) 前掲書, p.123。
- (25) 前掲書, p.125。
- (26) 前掲書, p.20。
- (27) 前掲書, p.25-26。
- (28) 前掲書, p.147
- (29) 前掲書, p.147。
- (30) 前掲書, p.150。
- (31) 和辻哲郎『風土』 p.43。
- (32) 前掲書, p.21。
- (33) 前掲書, p.26。
- (34) 前掲書, p.32。
- (35) O.C., III, p.825。
- (36) ウナムーノ「スペイン的愛国心の現在の危機」 p.290。
- (37) 同上

【引用（または参考）文献】

- a. ミゲル・デ・ウナムーノ『スペインの本質』 神吉敬三, アンセルモ・マタイス, ヨハネ・マシア, 佐々木孝（編）ウナムーノ著作集, 法政大学出版第1巻(1972)。
(スペイン語第二版: J. Masia, *Antropología del paisaje Climas, culturas y religiones Salamanca*: Ed. Sígueme, 2006)。
- b. 和辻哲郎『風土』 岩波書店, 昭和二年三月版
- c. 湯浅泰雄『近代日本の哲学と実存思想』 創文社 (1970)。

